

緊急時におけるオンライン授業の取り組み

ーマラヤ大学予備教育センター日本留学特別コースでの実践例と調査報告ー

西村尚・石松文枝・奥西麻衣子・小林安那・辰巳委子・

ジャミラ モハマド・マイサラ カマル・

ムハマド ナズルル ナナ クリザン・ロスニザ モハメド ノール

1. AAJ（Ambang Asuhan Jepun）について

AAJとは東方政策の一環として1982年にマラヤ大学内に設置されたマラヤ大学予備教育センター（Pusat Asasi Sains, Universiti Malaya：以下 PASUM）日本留学特別コースの通称である。学生は17歳～19歳のマレーシア国内からブミプトラ（マレー系及び少数民族）を対象として選抜された国や財団の奨学生で、ほとんどがイスラム教徒である。AAJでの最終目標は学生全員が日本の国立大学の工学系学部留学することである。留学条件として、文部科学省で定められた日本語及び教科（数学・物理・化学）の教育課程を修了し、日本留学試験（以下 EJU）と修了試験における基準点を突破することが挙げられる。そのため AAJ は日本語の授業を担当する日本語科、数学・物理・化学の授業を担当する教科に分かれている。日本語の授業はマラヤ大学 PASUM 所属のマレーシア人教員と国際交流基金派遣の日本語専門家が担当し、教科の授業は文部科学省から派遣された高校教員が担当している。このように AAJ は PASUM、文部科学省、国際交流基金の3機関によって運営されている。

AAJ は全寮制で、毎年5月に入学し約2年をかけて日本留学予備教育課程を修了する。コースは4学期に分けられ、週5日間1コマ50分授業が毎日8時間（金曜日は6時間）あり、各学期で中間試験と期末試験が行われる。期末試験後に平常点を含む総合成績で及第点に達しない場合は、追試験を行い、不合格の場合は退学になる。AAJ での日本語教育は文型シラバスに基づき、1年次は約750時間の授業があり、終了時点で日本語能力試験 N3相当の日本語力の養成を目指す。2年次の授業時間数は約450時間で、EJU 対策やアカデミックジャパニーズの授業を中心に行い、日本留学に耐え得る基準に達することを修了要件としている。また、教科の授業も1年次後半から日本語で行われ、授業や試験以外にも毎日大量の宿題やテスト等がある。2年間という限られた期間で日本の国立大学に入学するためには相当な学習が必要となる。

2. オンライン授業実施背景

本章では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的感染拡大の影響を受け、マレーシアで講じられた対策と、マラヤ大学及び AAJ 新2年生（38期生）で講じられた対策と状況を説明する。新型コロナウイルス感染者数の増加に伴い、2020年3月18日にマレーシア政府は2週間の活動制限令を発令した。活動制限令下においては食料品の購入や通院等を除く不要不急の外出が一切禁止された。マラヤ大学も原則入構禁止となり、職員は全員テレワークを余儀なくされた。AAJ は2020年3月現在新2年生（38期生）82名が在籍していたが、3月に年度末を迎え長期学校休暇に入っていたため、学生は全員帰省している状況であった。マラヤ大学は政府の方針に従い、活動制限令が解除されない限りオンライン授業を継続することを決定し、PASUM もライブ配信によるオンライン授業を要請した。上記の流れを受け、SNS 上に AAJ の管理職グループを作成し、緊急時のオンライン授業に向けての授業準備が進められた。このような状況下、3月30日開始予定の授業を延期とし、4月6日より各教員の家庭からライブ配信授業の実施が決定した。

オンライン授業開始にあたり次のような方針をとった。①できるだけ進度を変更しない、②オンライン授業がいつまで続くか見通しが立たないためカリキュラムの見直しは行わず、授業開始後に顕在化する問題点についてはその都度対応していく、③学生の通信環境を考慮し、全授業を録画し再受講できる状態にしておく、④2学年に進級すると大半が新教材となるが、学生に発送することができなかったため、全て教材データを配信する（学生に教材を郵送できたのはオンライン授業開始後2か月以上経った6月12日であった）。

その後、オンライン授業開始から3か月後の7月6日、大学から学生の帰寮が認められ、日本語科の教員は全員マレーシアに留まっていたことから、日本語の対面授業が開始となった。

なお、本稿3章以降は AAJ 新2年生（38期生）に対する取り組みを報告する。

3. オンライン授業の実施内容

3.1 実施期間と授業コマ数

オンライン授業の実施期間は2020年4月6日～7月2日の10週間（1週間の学期休みを挟む）で、授業コマ数は表1の通りである。例年、学期開始の第1週～第2週は日本語に特化した授業期間（以下、日本語集中週）としている。平常時は1日8コマの授業を行っているが、当初、オンライン授業をライブ配信で実施することに教員・学生双方がどこまで対応できるか未知数であったため、7コマに減らし、1週目は授業4コマと自習3コマ、2週目は日本語4コマ・教科2コマと自習1コマで行うこととした。自習コマは1日の最終コマに行い、オフラインでできる宿題をさせ、質問がある場合に担当教員が対応するようにした。また2週目に教科の授業を入れたのは、日本語の授業だけでは日本語科教員に負担がかかりすぎる恐れがあったためである。開始後

緊急時におけるオンライン授業の取り組み

2週間の様子から、コマ数を増やしても支障ないと判断し、3週目の通常週以降はコマ数を平常時と変わらない時間割にしたが、この間に実施されたアンケートの結果を受け（4章参照）、5週目以降は1日7コマ（うち自習1コマ）の形に戻した。

表1 平常時とオンライン授業時の授業コマ数（1コマ50分）

		1日あたりのコマ数		週あたりのコマ数	
		平常時	オンライン	平常時	オンライン
第1週	日本語 集中週	8 (日のみ)	7 (日4、自3)	38 (日のみ)	20 (日のみ)
第2週		8 (日のみ)	7 (日4、教2、自1)	38 (日のみ)	30 (日20、教10)
第3週～第4週	通常週	8 (日2-3、教5-6)	8 (日2-3、教5-6)	38 (日11、教27)	38 (日11、教27)
第5週～第10週		8 (日2-3、教5-6)	7 (日0-3、教3-6、自1)	38 (日11、教27)	30 (日9、教21)

日＝日本語、教＝教科、自＝自習

3.2 授業科目と授業形式

2年次の日本語の授業は、「聴解」「読解」「文法」「語彙」「漢字」「記述（EJUの記述対策）」からなる。また平常時、AAJでは学生全員が参加する講義型のレクチャーと、少人数のクラスに分かれて練習やフィードバックを中心に行うチュートリアルで二形式で授業を行っている。

通常、語彙はチュートリアル、文法はレクチャーとチュートリアルで行っていたが、日本語集中週では全てレクチャーで行った。背景には、これまでチュートリアルで2コマ～3コマを使って行っていた内容を、レクチャーにすることでコマ数を減らし、授業進度が遅れた場合への対応を想定していたことがある。また、オンライン授業開始までの準備期間が短く、クラス別のチュートリアルで展開することが困難な状況にあった。読解、聴解は、通信状態や使用機器が学生ごとに異なることを考慮し、日本語集中週では自習形式で進め、通常週から授業を開始した。漢字については、平常時と同じレクチャーで行い、通常週も同様に行った。なお、日本語集中週のレクチャーは全てマレーシア人教員が担当し、全ての日本人教員とマレーシア人教員が協力して、授業補助と宿題の添削を担当した。

通常週からは、日本人教員もオンライン授業を担当するようになった。また、グループワークを行う必要があったり、学生から大人数の授業では質問がしにくいという声があったりしたため、記述、語彙、文法宿題のフィードバックはチュートリアルに切り替え、細やかな指導ができるようにした。

3.3 使用ツールと運用

3.3.1 オンライン授業のプラットフォーム

プラットフォームは Microsoft Teams (以下 Teams) を使用することとした。導入の理由として①マラヤ大学が Microsoft のアカデミックライセンスを受けており、職員、学生全てにアカウントが用意されていたこと、②最大300人までの参加が可能なこと、③データ通信量が比較的小さいといわれていること、④ウェブ会議、チャット、データ管理といった機能が一本化していること等があった。

そういった機能を生かし、授業の実施、出席管理、宿題提出・返却、学生への連絡、教材の配布、テストの実施等は全て Teams 上で行った。出席管理については、Teams に出席入力ができるアドオンを加え、出席状況を確認できるようにした。しかし、入力のし忘れや、通信トラブルで入力できない等の問題も生じたため、授業前後に学生への呼びかけや確認を行うようにした。宿題の提出・返却は、Teams のチャット機能を利用した。また、フィードバックの時間を平常時のように授業として設けることが難しかったため、提出物にコメントを入れてフィードバックをする、訂正をさせて再提出を促す等、手厚い個別指導を行うようにした。

3.3.2 小テスト、単元テストの実施方法と評価

2学年では、週に2、3回のペースで行う語彙と漢字の小テストと、単元ごとに実施する漢字と文法の単元テストがあり、平常時はいずれも評価に算定される。オンライン授業期間中も学生の学習習慣が継続するようにテストを実施することとしたが、その方法については試行錯誤を重ねた。語彙と漢字の小テストについては、従来記述式で行なっているが、入力文字の自動変換ができてしまうという問題があり、当初 Moodle がベースのマラヤ大学の学習管理システム (LMS) を利用して選択式問題を作成し、数回実施をした。中には通信トラブルにより解答に不備のある学生や、時間内に答えられない学生が一定数いたため、2回受けられるようにし、解答時間も長めに設定した。しかし、それでも通信環境の問題で時間内に解答できない学生がいたこと、また解答中に不正が行われてもチェックすることができないことから、小テストの結果は評価に含めないこととした。代わりとして宿題の提出率を評価に含めることとし、学生に周知を行った。

上記の問題があり、漢字と文法の単元テストは、パスワード付きの問題用紙のファイルを Teams にアップロードして学生各自でダウンロードし、実施時間にパスワードを知らせてファイルを開き、各自でプリントアウトもしくは手書きで用意させた解答用紙に解答する方式に変更した。答えは写真に撮ってデータで送ってもらった。不正を疑うような形跡は見られなかったため、この方法で実施したものについては評価に含めることとした。

3.4 教員・学生へのサポート体制

オンライン授業の実施はAAJが始まって以来初のことであり、今回の実施にあたり、教科教員、PASUMスタッフとの連携が不可欠であった。そこで、AAJ教員・コーディネーター・PASUMスタッフ・学生代表で構成されるグループをSNS（WhatsApp）上に作り、オンライン授業のテクニカル面での情報共有、トラブル対応にあたった。また、Teamsの操作に関する教員からの質問やトラブル時に迅速に対応できるよう、日本語科教員2名、教科教員2名からなるチームを作り、教員に対するサポートも随時行った。

日本語の授業では、サポートとして教員1名が交替でレクチャーの授業に入り、トラブルのバックアップの他に、出席入力を学生に促す、授業を録画する、タイムキーパーとして授業担当教員に時間を知らせる、全教員に遅刻、欠席した学生をアナウンスする等の役割を担った。

更に、学生への連絡の徹底、仲間と鼓舞しあえる環境づくりのために、日本語科・教科の各担任と学生が参加する形で、日本語集中週開始前にSNS上にクラスごとのグループを作った。

4. 学生のオンライン学習環境の調査

学生の意見や様子から、教員が想定していない部分でオンライン授業に問題を抱えているのではないかという懸念が生じ、学生の学習環境を把握し授業改善に役立てることを目的に、教科と合同でオンライン授業に関するアンケート調査を2回実施した。1回目は日本語集中週が終わった時点の4月18日～20日に、2回目はオンライン授業を始めて2か月経過した頃の6月1日～10日に行った。アンケートはGoogle Formsを使用し、選択肢式または自由記述式で問うた。1回目は10問、1回目のアンケート結果に鑑み2回目は15問とした。質問は共に日本語で行い、自由記述は1回目は日本語で回答、2回目は母語のほうがより率直な意見が聞き出せるのではないかと考えマレー語での回答も可とした。なお、有効回答者数は80名である。本章では、緊急時における学生のオンライン学習環境を示すため、アンケート調査結果から「使用機器」「通信環境」「家庭での学習環境」を取り上げ、報告することとする。

4.1 使用機器

学生の使用機器に関しては図1のとおりである。1回目を実施したオンライン授業開始直後の4月中旬は、23名（28.8%）の学生がスマートフォンのみでTeamsにアクセスしており、小さな画面で授業を聞き、データで配信される宿題をこなさなければならない状態であった。自由記述でも「スライドが小さくて見えない」「スマートフォンでするのは大変だ」等といった回答が見られた。その他にも、「1日の授業時間に対してバッテリーがもたない」「長時間使用するとスマートフォンが熱を持ってしまい危険」等の問題点が挙げられた。また、自宅のプリンターの有無について、「プリンターがない」もしくは「故障やインク不足で使えない」と答え

た学生は24名（30％）であった。この結果を受け、教員側は授業時間や宿題の量を再検討し、1日8コマだった授業時間を5週目以降は6コマに減らすに至った。

6月初旬の2回目では、スマートフォンのみを使用する学生が10名（12.5％）に、プリンターが使えない学生が9名（11.3％）に減少しており、使用機器面の環境が改善された者が多少増えたようである。一方、使用機器面が改善されなかった学生に対し、「なぜパソコンやプリンターがないのか」を聞いたところ、最も多かったのは金銭上の理由であったが、「家にパソコンはあるが、他の家族が使用しているため使えない」という回答もあり、学生の家庭環境についても配慮する必要があると判明した。

また、2回目のアンケート結果とその時期に学生から寄せられた声から、使用機器の種類に関わらず、電子端末を使用したオンライン授業の長期化による健康面や精神面への影響も窺い知ることとなった。Teams 上で教材データを閲覧し、授業を受けたり宿題を提出しなければならない状態が続いたため、長時間スクリーンを見ることによる視力低下や体調不良、データ整理やファイルの送受信によるストレスを訴える学生が増加した。

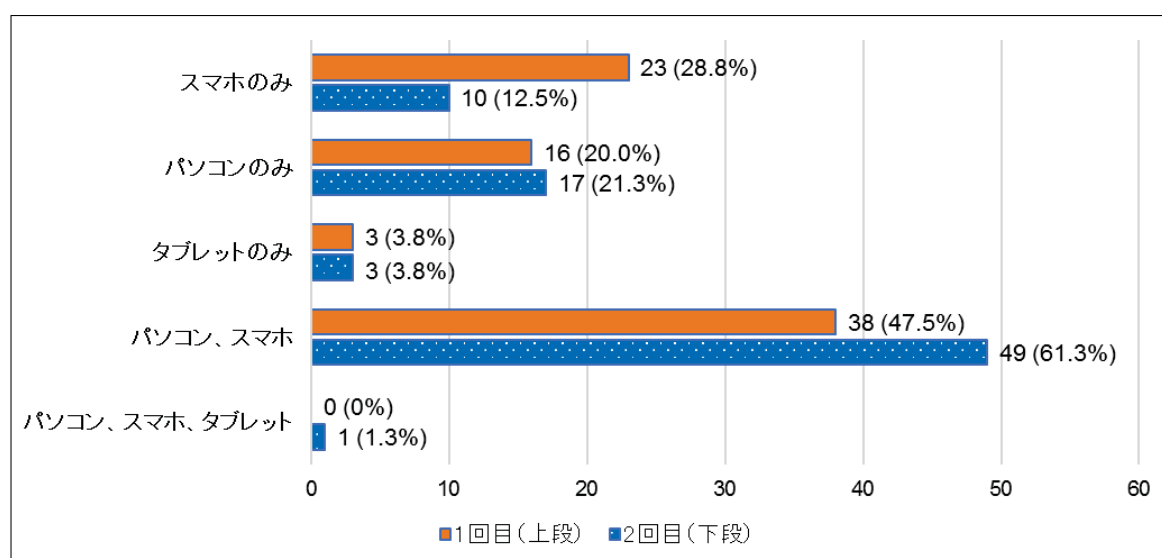


図1 使用機器「何を使って Teams を見ているか」人数（％）

4.2 通信環境

学生の通信状態は、図2のとおりである。1回目と2回目を比較すると、インターネットの通信状態はやや改善されたようである。これは1回目実施後から2回目実施までの間に、携帯電話のサービス会社による1日1GBの無料通信の提供、マラヤ大学からの支援による1か月10GBの格安プランの紹介、いくつかの家庭でインターネットプロバイダーの見直しを行う等、通信環境改善への対応がなされたことに拠るものと考えられる。しかし、2回目においても依然3分の1以上の学生が不安定な通信状態に悩まされていたことが分かる。

通信環境に関する自由記述を見てみると、1回目では、「音声が届かない」「先生の声が聞こえない」という回答が非常に多かった。図2で示した学生側の通信環境の問題だけでなく、授業を行う教員側の通信環境が万全ではなかったことも、このような回答が得られた要因のひとつとして考えられる。一方、2回目では音声や画像の不具合に言及した回答は減ったが、住んでいる地域や天候によって通信状態が左右されることを指摘する回答が目立った。

更に、データ通信量（パケット）の制限についても調査したところ、「制限がある」と答えた学生は、1回目29名（36.3%）、2回目22名（27.5%）であり、こちらもやや改善されたことが分かる。しかし、依然としてデータ通信量に制限がある学生もあり、1日の授業時間や宿題提出等を考えると、自費でデータ通信量を追加購入しなければならない者もいた。また、「データ通信量は無制限である」と答えた学生の中にも、「Wi-Fiの通信状況が悪いと、有料のデータ通信に切り替えなければならない場合がある」と回答した者もいた。

このように通信環境に関する項目では、ハード面のトラブルによってスムーズに授業が受けられないストレスと、オンライン授業によって発生する金銭面の負担が窺えた。

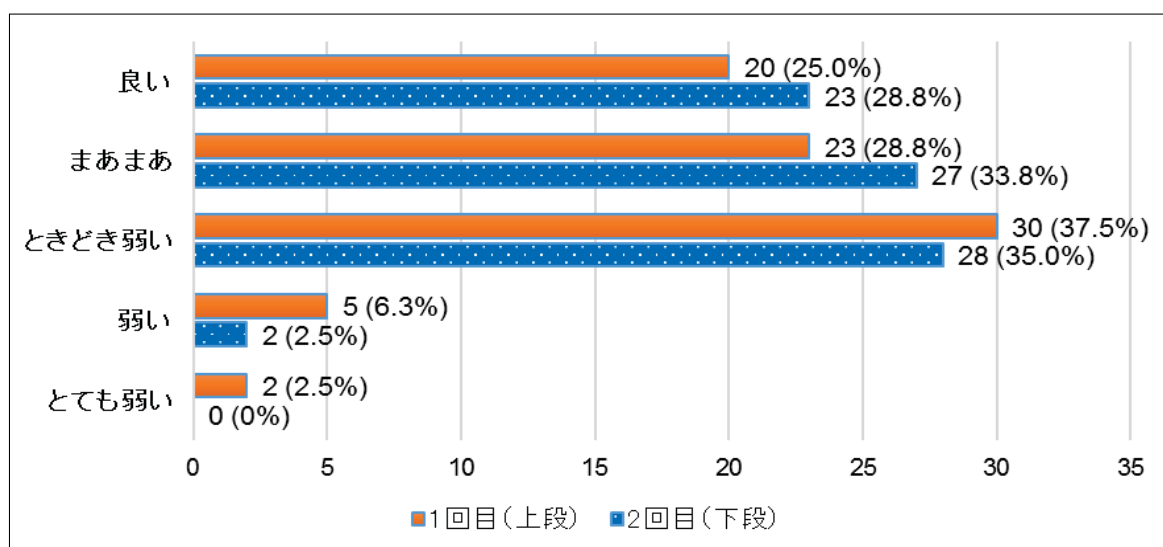


図2 自宅の通信状態「家のインターネットの状態はどうか」人数（%）

4.3 家庭での学習環境

1回目のアンケート結果及び2か月間のオンライン授業における学生の意見や様子から、使用機器や通信環境だけでなく、家庭の環境や事情も学習に影響していることが分かった。そのため、2回目のアンケートでは家庭での学習環境についても調査することとなった。オンラインで仕事をしたり授業を受けている同居家族の人数を聞いたところ、2名～4名という回答が多く、最大6名がリモート作業をしている家庭があることが分かった。また、自由記述からは、「家族がパソコンを使用しているため、自分はスマートフォンしか使えない」「数人が同じ部屋でリ

モート作業をしていて通信環境が悪い」等といった回答があった。他にも「家族の手伝いがあって勉強に集中できない」「自分の部屋がないので居間で勉強している」等といった回答が複数あり、家庭で学習環境を整えることが困難な学生がいることが明らかとなった。

一方、家庭での学習環境はある程度整っている学生であっても、「今まで家は勉強するところではなかったので、勉強に集中できない」「友達がいないから頑張れない」「授業や宿題でずっとパソコンに向かっていて、切り替えができない」「宿題が多く、提出物の整理やスケジュールの管理ができない」「授業の進度が速すぎる」等、自宅で1人で学習することに対してのストレスが蓄積されており、モチベーションが低下したり不安を抱える学生が多く見受けられるようになった。

5. 振り返りアンケートの実施

学生がオンラインで実施した授業方法を肯定的に捉えているのか否定的に捉えているのか、またその原因はどこにあるのかを探るために、対面授業開始後の8月上旬に学生にアンケートを実施し、オンライン授業について振り返ってもらった。調査は Google Forms を用いて実施した。質問・回答共にマレー語とし、80名の学生から回答を得た。以下はその結果である。

5.1 オンライン授業期間中の学習時間

平常時と比較し、オンライン授業期間中の学習時間がどのように変化したかについて質問を行った。回答者80名のうち9名は該当部分が未回答であったり、質問と異なる回答であったため、71名の回答を有効とし、集計を行った。

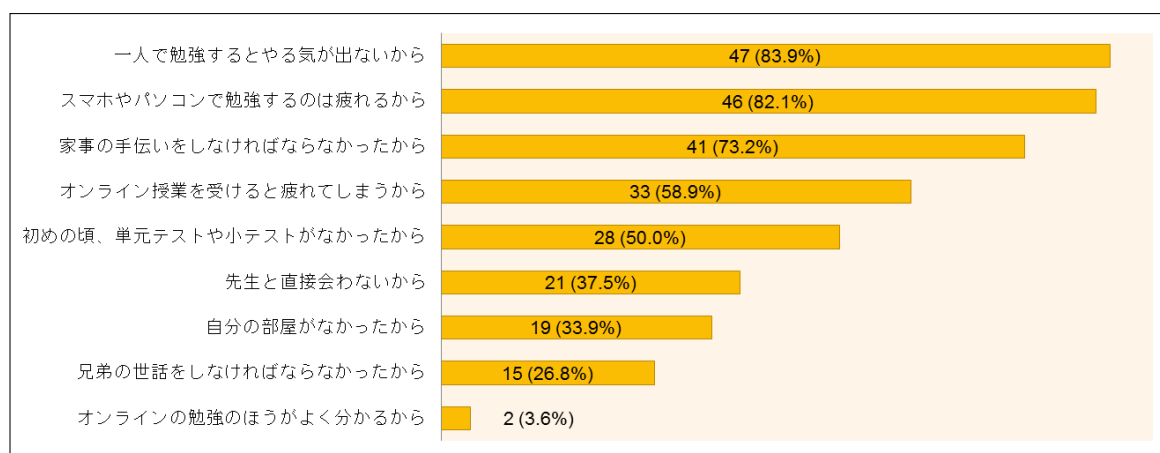


図3 学習時間が減った理由（複数回答）人数（%）

アンケート結果では、「学習時間が減った」のは56名（78.9%）、「増えた」が9名（12.7%）、「変わらなかった」が6名（8.5%）だった。学習時間が減った要因を選択式の複数回答で求め

たところ、最も多かったのが「1人で勉強するとやる気が出ないから」47名（83.9%）で、次いで「スマートフォンやパソコン等の使用機器で勉強するのは疲れるから」46名（82.1%）、「家事の手伝いをしなければならないから」41名（73.2%）だった。学習環境とモチベーションの問題、使用機器の問題、家庭環境の問題がオンライン期間中の学習時間に作用していることが分かった。一方で学習時間が増えた学生の要因は様々であったが、一番多かったのが「1人で勉強して助けてくれる友達がいなかったから」の6名（66.7%）であった。学習時間が減った要因、増えた要因共に「1人で学習すること」に多くの回答が得られたことは、孤立した学習環境が学習のモチベーションに大きく影響することを示しているといえよう。

5.2 オンラインになって受けやすくなった／受けにくくなった授業

オンラインになった授業が対面時と比較し、「受けやすくなった」か、「受けにくくなった」か、5段階のリッカート尺度を用いて「文法」「読解」「聴解」「漢字」「記述」の5つの授業について学生に振り返ってもらった。有効回答数は80名である。それぞれの要因については自由記述とし、コーディング作業を行った。どの授業に関しても30%～40%の学生が「受けにくくなった」「やや受けにくくなった」という回答をしており、多くの学生がオンライン授業にやりにくさを感じていた。「受けにくくなった」「やや受けにくくなった」という回答が最も多かったのは、「文法」授業の39名（48.8%）であった。その一方で「受けやすくなった」「やや受けやすくなった」という回答で多かったのは「漢字」授業の18名（22.5%）、「聴解」授業の17名（21.3%）で、「聴解」授業は「変わらなかった」という回答を含めると50名（62.5%）に上り、「聴解」授業が、僅差ではあるものの、最もオンラインのマイナスの影響を受けにくい授業であることが分かった。

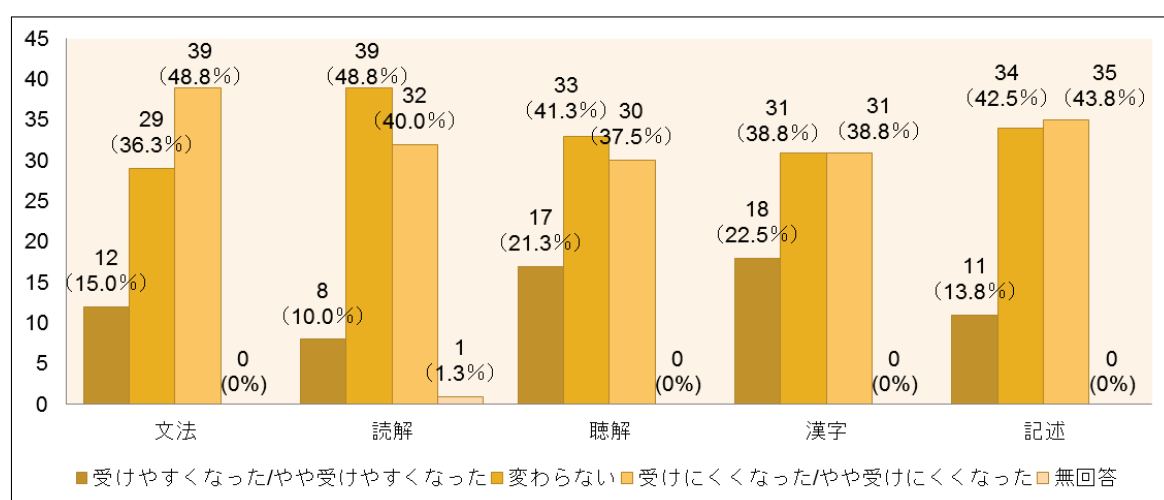


図4 「オンラインになって授業が受けやすくなったか」人数（%）

以下、自由記述の回答をもとに各授業の特徴的な要因を考察する。

「聴解」授業が「受けやすくなった」要因は使用機器に起因するものが最も多く、イヤホンやヘッドフォンを使うことで聴きやすくなったという回答が多くみられた。イヤホン等の使用によりスピーカーで聴くよりも周囲の干渉が少ないので、集中しやすくなったことが要因として考えられる。一方で「受けにくくなった」と答えた学生30名(37.5%)も多く、その要因として家庭環境を挙げた学生が8名(10.0%)、通信環境を挙げた学生が8名(10.0%)存在した。こうした学生には家庭での受講に際してはヘッドフォンやイヤホンの使用を推奨することがよさそうである。

「読解」授業は「受けにくくなった」「やや受けにくくなった」という回答が32名(40.0%)おり、その要因にパソコンやスマートフォンで教材を読むことに拠るとされる10名(12.5%)の記述があった。紙媒体の教材が手元になかったことが「受けにくくなった」という回答の大きな要因といえそうである。しかし最も多かったのは「変わらなかった」と回答した学生の39名(48.8%)で、「受けやすくなった」「やや受けやすくなった」とあわせると、47名(58.8%)にまで上る。長い文章をスマートフォンやパソコンの画面を通して見ることは学生にとって苦痛ではないかと予想していたが、紙媒体でなくても問題ないと考えている学生が半数以上存在していたことは意外な結果であった。

「記述」授業は、「変わらなかった」という回答が34名(42.5%)と最も多かった。また授業が「受けやすくなった」要因に授業方法に起因する回答が6名(7.5%)あった。「記述」授業はEJUの記述問題に必要な論理的思考力を養うために、Teamsのチャット機能とGoogle Sheetsを用いてテーマに関わるディスカッションを行った。平常時では口頭で行っていた活動を、オンライン時ではチャット機能を用いて授業ができたことが、「変わらなかった」という回答の理由ではないかとみている。今後の記述授業の在り方を考察するに値する回答であった。

「文法」授業は「受けにくくなった」という回答が最も多かった授業である。受けにくくなったことの原因として、授業中に教師とのインターアクションが取りづらかったことを挙げている回答が8名(10.0%)あった。そのため授業中質問ができず、受けにくくなったと多くの学生が考えていたようである。AAJでの文法授業はレクチャーの後、クラス別にチュートリアル時間を設けているが、この形式の授業によって学生が理解を高めていたことが、アンケートを通じて改めて浮き彫りになった。

5.3 オンライン学習環境でよかったこと

その他「オンライン学習環境でよかったこと」で最も回答が多かったものに少し触れておく(有効回答者数80名、複数回答)。それは「録画した授業で復習したり、分からなかったところをもう一度確認したりすることができた」というもので72名(90.0%)の回答であった。対

面授業が可能になった現在においても、録画した授業を復習用に準備しておくことは有効であると思われる。

6. 成績分析

約3か月間にわたり行われたオンライン授業は、学生の学習成果にどのような影響を与えたのだろうか。AAJ では7月に2年次の中間試験が実施された。出題範囲は全てオンラインで授業を行った内容であり、その間の学習成果をみる一手段になると考えられる。

下表2は、2017年度から2020年度までの2年次中間試験結果を表したものである。中間試験は毎年同じ時期に行われるが、範囲がわずかに異なる年がある点、また、毎年少しずつ試験問題が改訂されている点を考慮し、表の作成にあたっては4年間にわたり変更がない問題のみを取り出し学年平均得点率を算出した。なお、読解問題は2019年度に大幅な改訂が行われたためそれ以前と比較できるデータが少なく、2019年度のみとの比較となっている。試験作成時に設定された目標平均点は、いずれの年も聴解と読解は75%程度、文法、語彙、漢字は85%程度である。

表2 2年次中間試験平均得点率経年比較 (%)

	聴解	読解	文法	語彙	漢字
2020年度 (38期生)	71.4	79.6	82.5	79.4	62.8
2019年度 (37期生)	71.5	76.8	86.5	85.8	87.1
2018年度 (36期生)	70.7	—	88.0	89.1	88.5
2017年度 (35期生)	67.6	—	85.9	89.6	89.2

表2の結果から、オンラインで授業を受けた38期生は、漢字の成績が際立って悪いことが分かる。一方で、漢字以外の技能は、語彙の点数がやや低いものの概ね例年と同じ結果となり同等の能力が示された。

次に、成績が悪かった漢字について詳しく見てみる。次表3は、38期生が2学年に進級する直前に行われた1年次の期末試験結果である。試験は、どの技能も平均点が85%程度になるよう調整し作成された。漢字の平均得点率は文法、語彙より低いものの聴解、読解よりは高く、表2でみられる38期生の技能間の差とは異なる傾向がみて取れる。オンライン授業は、1年次期末試験実施後に開始され2年次中間試験前に終了しているため、2年次の中間試験で漢字の成績が際立って悪かったのにはオンライン授業移行に伴う何らかの要因があることが推測される。

オンライン授業に移行する前の漢字の授業は、レクチャーで行われており、学生とのインターアクションが比較的少ない授業であった。また、オンライン授業になってからも、授業時間、コマ数、担当教員、授業の進め方等に大きな変更はなく、他の授業と比較すると授業自体はオンラインによるマイナスの影響を受けにくいものであると推測される。

表3 38期生1年次の期末試験結果 (%)

	聴解	読解	文法	語彙	漢字
平均得点率	83.2	81.9	85.8	89.6	84.7
最高得点率	98.7	100.0	99.1	100.0	100.0
最低得点率	61.8	45.8	54.7	56.9	36.7

それにも関わらず漢字のみが大きく点数を下げた理由は何であろうか。5章で述べた学生アンケートの結果をみると、その要因は「単元テストや小テストが厳しくなかった」、「練習しなかった」、「集中できなかった」、「書く機会がなかった」といった授業以外のものであることが分かる。漢字と語彙の小テストは、従来週に2、3回のペースで紙に書かせる形で実施していたが、オンラインでは全て選択式となった。また、授業期間の前半は教員側の準備が間に合わず小テストが実施されなかったり、受験の管理が徹底されていなかったりした。更に、記述、漢字以外の文法等の宿題を大半の学生がデータ入力して提出しており、このような複数の要因が学生のモチベーション低下を招き、書いて覚える機会をなくしてしまったのではないかと推測される。

以上のことから、オンライン授業期間の漢字の小テストは、選択式ではなく従来どおり書かせることが必要であり、それによって漢字の能力低下を防ぐことができると考えられる。また、小テストの実施が難しかった当初、漢字学習のモチベーションを上げるための何らかの仕組みを準備しておくべきであったことが反省点として挙げられる。

7. まとめ

以上が、AAJ がオンライン授業において実施してきたことである。紙幅の関係上、本報告では全てを詳細に記すことはできなかったが、限られたスペースにでき得る限りのことを挙げることで、他の機関におけるオンライン授業実施の参考になることを目指した。同時にアンケート調査を通じて、マレーシア特有の家庭環境や AAJ の学生ならではの学習習慣等が浮き彫りになり、オンライン授業の実施にはこうした学習者の学習環境や学習習慣等への考慮も重要であることが明らかになった。

また4章、5章のアンケート結果と6章の成績を複合的に見ていくことで、オンライン授業期間中の個々の学生の学習環境が、学生のモチベーションや成績にどのような影響を与えたか、更に深い考察ができるのではないかと予想している。今後こうした考察を進め、オンライン授業の更なる効果的な活用に役立てていきたい。